平成 21 年 7 月 1 日作成
（第 44 号号）

ホツマツタヱ「ゆかりの地」を歩く
高千穂峰のサ（南方向）にあった　宮崎宮、吾平山上陵　（その 4）

吉　田　六　雄

吾平山上陵へ

8 月 11 日、南国・都井岬での朝は、太平洋からの閃光で目が覚めた。都井岬観光ホテルでの早朝の景色。やたらと馬牧場の芝に、朝露が映えて眩しい。朝食を終えて、9 時に都井岬観光ホテルを出発した。先ずは都井岬への、ちょっとした観光である。都井岬の先端までは、車で 2 分くらいである。岬の先端には、白亜の「都井岬灯台」があった。灯台の最上階から見る風景は、海と空と太陽がいっぱいである。この魅力が旅情を誘う「灯台観光かなあ」と、思いながら灯台を後にした。

今日の最大の関心事は、「吾平山上陵」の訪問である。吾平山上陵までは、約 55Km の距離になる。その間の道中は西方向の串間市街を経由し、国道 220 号線と共に志布志湾を 4 分の 1 周して、串良町、吾平町へと走行した。その間に食堂らしき所もなく、あるのは畑や田んぼや山ばかりである。やっと見つけた吾平の小さなセブンイレブンで、おにぎりなどを購入して、田んぼの脇道に腰をかけながら、優雅（？）に昼食を取った。ここからは肝付役場、吾平中学校を経由して県道 544 号を南に、神野の方向に走行する。そして「大隅広域公園」、「吾平山上陵」へは、「左折り」と記載された標識が見えた。しばらく道なりに走行すると、吾平山上陵の駐車場に着いた。

吾平山上陵

吾平山上陵のある地区名は、鹿児島県鹿屋市吾平町になる。古くは「姶良（古代郷名・中世荘名・近世郷名）」と称し、明治 22 年 4 月 1 日に 3 村合併し、鹿児島県肝属郡姶良村となる。そして昭和 22 年 10 月 15 日の町制、名称（表記）変更で鹿児島県肝属郡姶良町となる。ここ吾平町にある吾平山上陵の正式な呼び名は、「あいらのやまのうえのみささぎ」と云うらしい。吾平山上陵の駐車場も大きく約 200～300 台は駐車できそうである。駐車場から「上陵」に入る参道の道幅は広かったが、人が通れる参道部は、中央より少し右端にジャリ石の参道になっていた。ジャリ石の参道の左側には、背丈が 30cm ほどの灌木の囲みがしてあり、その中は芝生や緑豊かな桜の木々で新鮮に被われていた。

この新鮮さは、南国特有の「高温多湿」のためだろうか。季節は真夏なのに、まだ春先を思わせる景色であった。そんな囲みが 4～5 個所はあっただろうか。そんな中の参道を 100m くらい進むと突き当たりに「吾平山上陵」の案内板があった。また左手側に一つ目の橋が見えた。先に案内板の説明を読むと『山陵とは帝皇の塚墓をいう。日本書紀に「彦波瀲武ウガ草葺不合尊は西の州の宮で崩御、日向の吾平山上陵に葬る」と載せてある。・・（中略）・・陵域は九・三五ヘクタール、窟内は三アールほどで御陵のあるところを俗に鵜戸山といい窟を鵜戸岩屋（窟）と称している。

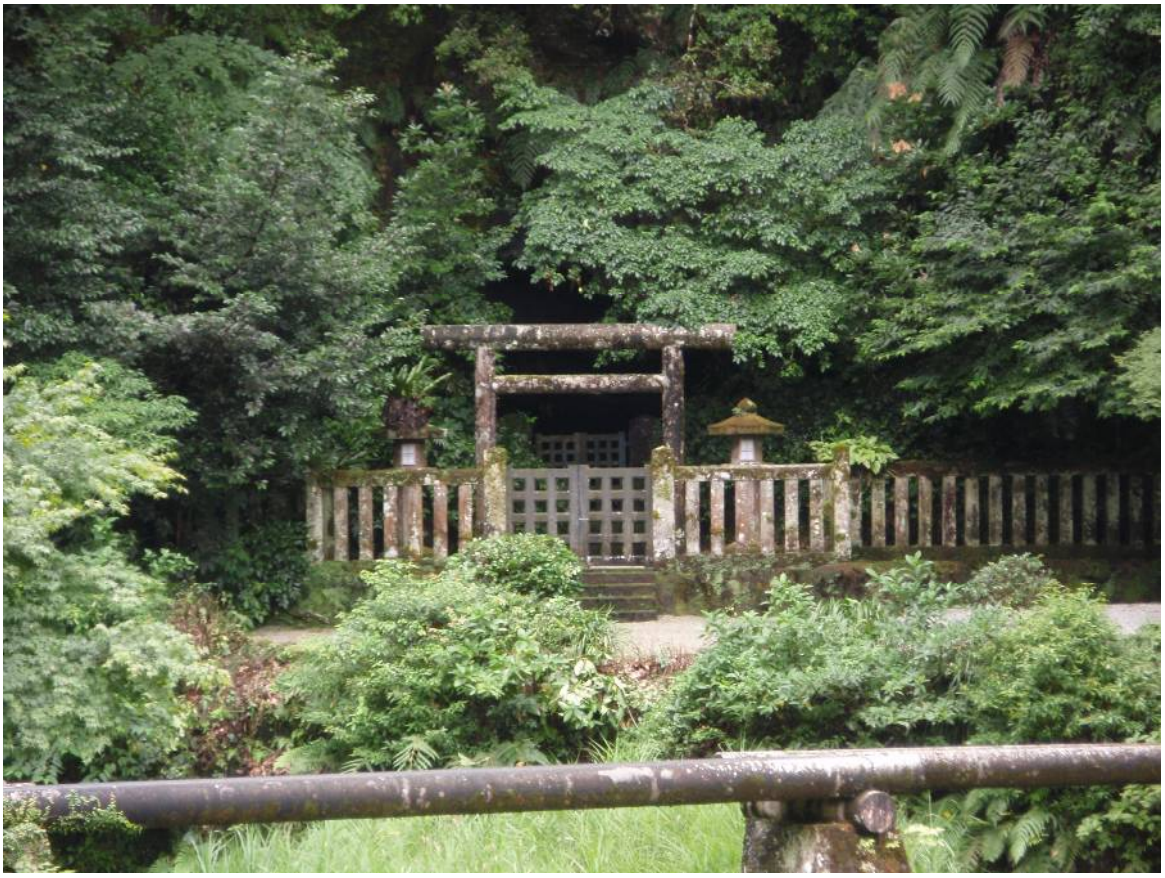
姶良名勝誌には窟内には大小御陵二ヶ所あり、その内の大の塚は上記尊の御陵で、その東の小の塚は「后妃玉依姫」（神武天皇の御母）の御陵と申伝云々と記されている。領域は甚だ広い。右記尊を祀る鵜戸六所権現（現鵜戸神宮）（注 5）はここから北方約六十キロメートルの麓宮前にある。神武天皇妃吾平津姫を祀る大川内神社は南方約四キロメートルの神野大川内の地にある。』と記載していた。

（注 5）鵜戸六社権現
　鵜戸山上陵内には「鵜戸六社権現」があったが、1871 年（明治 4 年）の災害により現在地に遷座し名称も鵜戸神社に改められている。（参考文献:ウィキペディア）

　カモヒト天君を祀る山陵の参道はまだまだ続き、先ず左側に手摺が四角形の形をした一つ目の橋を渡る。更に 50m くらい歩くと、手摺部が円筒形をした二つ目の橋が左手に現れた。橋全体は少し太鼓状の形状をしていた。その橋を渡ると、参道全体が薄暗い林の中に入りながら、右方向に曲がって行く。すると目の前に三つ目の太鼓の橋が現れた。この橋は橋全体に苔が生えて、神秘的であった。そこを過ぎてもまだ林が続き、右手に姶良川の流れを目にした。その少し先に小さな「管理事務所」があった。ここの管理事務所を訪ねると私と同年輩の管理官が見えて、優しく「吾平山上陵」のパンフレットを差し出してくれた。更に「山陵」の管理事務所からして、私共が知らない世界の「天皇の系図」を持ち合わせていないかと尋ねて見たが、頂いたのは「日本歴史シリーズ（世界文化社）」の日本誕生の中の『日本神話の諸神の系図（底本：真福寺本「古事記」』であった。・・・このことに少しガッカリしたが、ホツマツタヱ以外には、古代日本の真実が見えてないようで、私が「ホツマツタヱゆかりの地を歩く」の取材のため、「ホツマツタヱ」の内容を確認して歩いている意味が、更に明確になってきた。

　ここを過ぎるともう目の前に、姶良川を挟んで、右の奥にカモヒト天君が眠る「鵜戸岩屋」があった。左手側には「鵜戸岩屋」を臨む「山陵の参拝場」があり、幅約 30m、長さ約 100m はあるだろうかと思える広場が目に入った。そして参拝場と鵜戸岩屋の間を仕切る姶良川には、コンクリートの円柱を 3 本並べ、その川の中間点で別の 3 本と互い違いに連結された橋があった。カモヒト天君が眠る「鵜戸岩屋」を表現すると、背丈の高い新緑の断崖で覆われており、その下の方に、悠久の歴史を感じさせる神明鳥居があり、また左右の方向には柵が設けられていた。ここが「吾平山上陵」であった。・・・その奥の岩屋に向かって、カモヒト天君にお参りした。

「吾平山上陵と参拝場」



カモヒト天君の老いとタケヒトの筑紫入り

先（43）号の「カモヒト天君と鵜戸の浜」の項で、カモヒト天君の「鵜戸の浜入り～鹿児島宮への巡幸」を取り上げたが、その後カモヒト天君は、筑紫で 10 年間過ごされる内に、神上がりの兆候が現れた。そのことが「ホツマツタヱ」文献 27-81～83 文に説明されている。

（訳文）

カモヒト天君が鹿児島宮に来られて10年間にもなり、その精力的な活躍のお陰で民も潤って行った。そしてこのことで天君は安心されたと見えて、めっきり年老いされた様子であった。このことに周りの者が気づき、急いで滋賀県のタガ（多賀）で政務をされていた皇子のタケヒトに報告されるや、タケヒトの皇子は非常に驚かれた。そして「百の典（先人の教え）」を授けられた「タネコ」を伴って多賀より早足の大鰐船に乗り、西宮を経て鵜戸の浜に着かれ、陸路で「宮崎宮（注６）」に入られた。

27-83～85 文（直訳文）

十年に民も
賑ひて　　万歳歌ふ
宮崎（注 6）の君の御心
安まれば　　齢も老ひて
ハヤキジの　多賀に告ぐれば
驚きて　　皇子タケヒトと
守タネコ　　多賀より出でて
西宮　　大鰐船乗りて
鵜戸の浜　　宮崎宮（注 6）に
至ります

タケヒト「世の御親なり」

そして滋賀の多賀より駆けつけた「タケヒト」らに、年老いたカモヒト天君は云われた。（27-89～90 文）

（訳文）

皇子のタケヒトは、「スベラギ（世の御親）なり。そしてタケヒトも 15 歳になれば成人であり、私（カモヒト天君）の代わりである。「タネコ」の助けを受けて、この世を治めてくれ。」と遺言された。

27-89～90 文（直訳文）

タケヒトは　世の御親なり
・・（中略）・・
タケヒトは　歳十五なれば
わが代り　　タネコが助け
治むべし

カモヒト天君の神上がり

初代天皇である「神武天皇」の父君である「カモヒト天君」は、鹿児島県吾平津山（現：吾平山上陵）で神上がりされた。（27-92～95 文）

（訳文）
　そしてカモヒト天君は、『大事なのはマコトつまりホツマになりきるといふことだ。そうなれば自らミクサの宝は偉大な力を発揮する。これこそ、わが確信である。』と宮崎山の洞に入られ、アカンタイラ（天国へ）と神上がりされた。そして呼び名は、「アカンタイラ」を縮めて→「アイラ」→「吾平」と呼ばれた。（この項の一部は月刊ホツマ 113 号より引用した。）そして皇子のタケヒトは、喪主を立派に勤められ、喪に服すること四十八日が過ぎると、筑紫を治める県主三十二神を集められた。そして相談して神々がお贈りした名は、筑紫を神上がりの地に選ばれたスベラギとして、「筑紫スベラギ」の名をお贈りした。そしてこの理由を滋賀の多賀に告げられると、多賀においても四十八日の喪に入られて、「日向の神」としてお祀りされた。また京都の河合のオニフでは、「賀茂の神」としてお祀りされた。この様に多くの臣や神々に慕われたカモヒト天君が眠られる「吾平津山は、御祖神」の山であった。そして後に玉依姫も神上がりされて、京都の河合の下鴨神社にて、御祖神としてお祀りされた。そしてカモヒト天君と玉依姫の両神は、仲睦まじい夫婦の神であった。

27-92～95 文（直訳文）
　　ホツマなる時
自づから　三種の宝
集まりて　御祖となすが
ホツマぞと　宮崎山（注 6）の
洞に入り　吾神平（あかんたいら）と
上がります　皇子喪お勤め
四十八済む　三十二（神）集まり
上ぐる名は　筑紫スベラギ
この由お　多賀に告ぐれば
喪に入りて　日向の神と
祀りなす　オニフに祀る
賀茂の神　吾平津山は
御祖神　後に玉依姫
神となる　河合宮に合せ
御祖神　女男の神
著しるきかな

宮崎神宮への疑問

　宮崎と云う名前の代表的な町は、宮崎県宮崎市（平安時代より宮崎郡があり）がある。故松本先生も「月刊ホツマ 113 号」の中で、「十年に民も　賑ひて　万歳歌ふ　宮崎の　君の御心　安まれば　齢も老ひて」の「宮崎」を「今の宮崎市の宮崎神宮を指す」と述べられている。だが「宮崎神宮で年老いされたカモヒト天君が、神上がりのために約 120Km も離れた吾平山上陵（宮崎山の洞に入り）に行かれるだろうか」と考えただけで、南九州の険しい地形と距離を忘れた発想の様に思えてならない。

　もし宮崎が宮崎神宮であれば、多賀より大鰐船で航行して来るのに、宮崎の沖を通過して鵜戸の浜に行かれるだろうかとの疑問が沸く。それに対し鹿児島宮へは、鵜戸の浜に到着された後、地形的にほぼ直線的に鹿児島県曽於（都城）を経由して鹿児島宮に行ける。そのことを裏付ける様に、現在でも幹線道路がある。

宮崎（宮）、宮崎山（注 6）

一方 27-83、85 文や 27-92 文に出現する「宮崎、宮崎宮、宮崎山」は、文章の前後より現在の「宮崎市（注 7）」での出来事とでない（注 8）ことがわかる。その宮崎の文字は「ホツマツタヱ」文献に、①「十年に民も　賑ひて　万歳歌ふ　宮崎　の君の御心　安まれば　齢も老ひて」、②「大鰐船乗りて　鵜戸の浜　宮崎宮に　至ります」、③「宮崎山の　洞に入り」と記載している。①②前二つの文章をそのまま読むと「宮崎」「宮崎山」は、現在の「宮崎市」を連想しがちであるが、③三つ目の特に「宮崎山」は、「宮崎山の　洞に入り」を読んだだけで、「宮崎神宮」のことでなく現在の「吾平山」を指していることがわかる。では何故にホツマツタヱ文献は、宮崎（宮）（山）と表現したのであろうか。そのことの理由を捜すと「カモヒト天君」が鵜戸の浜に上陸して、鹿児島宮に行かれたことに由来する。この鹿児島宮は「昔、ニニキネ天君が滞在された宮」のことで、「古代の鹿児島宮(注 9)」を指しており、前後の文章より明白（注 8）である。

そのことから「宮崎宮」、「宮崎山」の前文字の「宮」は、「古代の鹿児島宮(注 9)」を指していることがわかる。そして「宮崎宮」、「宮崎山」の「崎」は、方向を指していることがわかる。そして次の「宮崎宮」の後文字の「宮」や「宮崎山」の後文字の「山」が、その方向にあったことがわかってくる。それにしても何故に「カモヒト天君」は、神上がり地にこの「宮崎宮」や「宮崎山」を選ばれたかである。この理由は、「カモヒト天君」は筑紫に入られてからも、「ニニキネ」の業績に倣い行動されるなどして、「ニニキネ天君」をお慕いされていたことからも想像できる。このことから「宮崎山」をして、「ニニキネ天君が、天孫降臨された高千穂の峰」より「サ（真南）」の方向を望まれた場所が、③「宮崎山の　洞（吾平山上陵）」であったと思わせる。そしてこの様な思いを抱かれて、「カモヒト天君」は、「宮崎宮」で余生を送られて「宮崎山」で神上がりされたことが、「ホツマツタヱ」文献よりわかってくる。

（注 7）宮崎の地名の起源

宮崎市の宮崎の地名の起こりは、宮崎市の北北東にある「江田神社（御祭神;伊邪那岐尊）」の宮前として、「宮前」→「宮崎」になったと云われている。江田神社のご由緒を引用すると、「本神社は太古の御創建にして、その創立の年代は詳かならざるもこの地一帯は古来所謂「日向の橘の小戸の阿波岐原」として、伊邪那岐の大神禊祓の霊跡と伝承せられて・・（後略）・・」

（注 8）宮崎神宮、鹿児島神宮

現在の宮崎神宮や鹿児島神宮を訪ねると、元の宮の名は「高千穂宮」である。宮崎神宮はその跡に「宮崎神宮」を鎮座させたとある。また現在の鹿児島神宮の少し離れた場所に、「旧高千穂宮址」がある。このことは既に「検証ホツマツタヱ第 9 号（平成 15 年 10 月）」で発表していた。高千穂宮の本宮は宮崎県高千穂町に鎮座（検証ホツマツタヱ第 41 号・平成 21 年 2 月に発表済）しており、宮崎や鹿児島の「高千穂宮」は高千穂町より勧請され宮である様だ。

高千穂峰にあった古代の鹿児島宮（注 9）

「ホツマツタヱ」文献に記載の「鹿児島宮」はどこにあるのであろうか。「ホツマツタヱ」文献には、その「鹿児島宮」の所在地は記載してない。だが「室津より　大亀船に召して　鵜戸の浜　鹿児島宮に」と記載しているところから、「鵜戸の浜」より、次ぎに「鹿児島宮」に行ける場所であることがわかってくる。そうすると鵜戸の浜より西北西の方向になる、隼人町の「ホホデミ」の鹿児島神宮なのか。それとも鵜戸の浜より西北の方向になり、「ニニキネ」が天孫降臨された「高千穂峰」で、最初に造られた宮なのかである。私は霧島神宮、宮崎神宮、鵜戸神宮、吾平山上陵と歩いて調査して行く内に、「ホツマツタヱ」文献に記載の「鹿児島宮」は、「宮崎山の　洞（吾平山上陵）」の文面より、「洞（吾平山上陵）」の真北方向で、かつ、高千穂峰よ

り見て真南方向にある、「高千穂峰」に最初に造られた「この宮」こそが、「古代の鹿児島宮」ではなかろうかと思う様になってきた。そして今は「その宮」は存在しないが、同じ様に現に「霧島神宮」も、山の噴火などで消失して、古よりは2～3回、場所を移動している。「古代の鹿児島宮」も噴火などで、消失したままになったなど、そんな運命にあったのでのではないだろうか。それにしても一時は、「ホツマツタヱ」文献の「鹿児島宮」は、（現）鹿児島神宮ではなかろうかと推定した時期もあった。だが調査して行く内に疑問がでてきた。その疑問は（現）鹿児島神宮、（旧）高千穂宮、および（旧）鹿児島神社の所在地である。この三つ神社、神宮の宮の所在地はいずれも、高千穂峰の山麓にない。その所在地が、（現）霧島市隼人町内の敷地（敷地内での移動はあり）にあり、西暦927年頃から移動した形跡がなかったことである。そして祭神も、過去から現在まで変化してなく、「ホホデミ」であった。

大川内神社と吾平津姫

読者は「吾平山上陵」の案内板の最後の文章に、「神武天皇妃吾平津姫を祀る大川内神社は南方約四キロメートルの神野大川内の地にある。』と記載されているのを記憶されているだろうか。この吾平津姫は神武天皇の皇子の「タギシミミ」のお母さんである。その吾平津姫の出身が、吾平山神陵の近くの「神野地区」にあるとのことである。この情報を元に吾平山上陵から神野の方向に、走行安定性の良いスズキの「スィフト」を走らせた。しばらくすると、大川内神社の案内板(上側が南方向)があった。その大川内神社の場所は、吾平山上陵より南方向に4Kmの場所で、吾平町にある「中岳」と云う山の右手方向であった。その方向に車を走らせた。だが知らない地域の4Kmは長い。30分程度捜したが、捜せなかった。また民家にも昼間は尋ねる人が不在であり、残念ながらあきらめて車を引き返した。それにしてもこの神野地区は山間の地区である。民家もまばらな地区である。そんな地区に今でもひっそりと古代を守る「大川内神社」があったことに驚かされた。

・・・横浜に帰ってから、吾平津姫の大川内神社を掲載するホームページを目にした。ご参考ですが、「吾平津姫」を祭る大川内神社を Web よりダウンロードしました。ご覧下さい。

大川内神社の方角

宮崎（宮）、宮崎山の項で、『「ニニキネ天君が、天孫降臨された高千穂の峰」より「サ（真南）」の方向を望まれた場所が、③「宮崎山の　洞（吾平山上陵）」であった。』と説明した。また、大川内神社と吾平津姫の項で、「吾平山上陵より南方向にあった」と説明した。この二つの説明文に共通する点は、いずれも「サ（真南）、南方向」であった。そしてその再確認のために、最新の電子地図にて確認して見た。最初に起点は、①高千穂峰になる。そしてその高千穂峰を起点に点を真南に移動して行く。すると②吾平山上陵を通過する。更に南に点を移動すると③大川内神社を通過していた。（地図の縮尺 1/10000 にて）だかこの南方向に一致する線上に、高千穂峰、吾平山上陵、大川内神社が、何故に並ぶのか、現在不明であるが古代ファンには、たまらない真実である。

（参考文献）

隼人学（南方社）
「志學館大学生涯学習センター、隼人町教育委員会編」

鹿児島神宮の起源

大川内神社の所在地の捜索をあきらめて、次ぎ目的地の指宿温泉へと急いだ。指宿は薩摩半島にあり、現在地の吾平は大隅半島にある。その間に鹿児島湾（錦江湾）がある。大隅半島側の根占港より指宿の山川港までは、「南海郵船フェリー」を予約していた。そして吾平町から根占町のフェリー波止場までは、山道であったが、道が空いており約 30 分で到着した。そしてフェリー出港までの時間待ちを利用して、近くの根占町観光物産会館で「涼」を取りながら、お土産物を物色した。そのお土産売場の一角に、鹿児島関連の本を目にした。その本の一冊に「隼人学（南方社）」を目にした。中表紙に「志學館大学生涯学習センター、隼人町教育委員会編」の文字が浮かぶ。この「隼人学」の 41～51 頁に「歴史と民族　古事記と熊襲・隼人と浜下り考（川上親昌）」の論文があった。この川上さんの最後の頁の説明を見ると、（かわかみむ・ちかまさ　鹿児島神宮宮司）となっていた。

この鹿児島神宮の宮司である川上さんが述べられる鹿児島神宮の発祥の地の記載であるが、51 頁下段の本文を引用すると『古代からの地名、塩土翁が造ったという目無籠の地「鹿児山」は、鹿児島神宮の発祥の地であり、鹿児島の地名の源である。隼人は神話のメッカであるし、日本民族の発祥の地であり、始代天皇神武天皇は、祖父あたる山幸彦を崇拝し、住居を廟として奉られた。これが鹿児島神宮の起源といわれ伝えられてきた。』と述べられている。その鹿児山について調べて見ると、所在地は「大隅国桑原郡鹿児山」となっている。そしてその場所は、現在の「鹿児島神宮」の少し離れた場所にある、「旧高千穂宮址」であり、更に古くは「鹿児島神社址」であった。なお鹿児島神宮の変遷については、検証ホツマツタヱ第 30 号において、「927 年（延喜式)、鹿児島神宮は、鹿児島神社の名が見える。」と報告していた。一方「鹿児島神宮」の創祀について「鹿児島神宮史」を再び読むと、「鹿児島神宮の創祀は古く、日子穂穂手見尊の宮居させ給う高千穂宮をその侭（まま）御社殿として奉斎したものであろう。一説には、神武天皇の御創建ともある。・（後略）・」と記載してあった。そして（現）霧島市隼人町内の地に、鹿児島神社→高千穂宮→鹿児島神宮と変遷の跡があった。

（おわり）